

「光陰矢のごとし」と表現されますが、時代は宇宙へも飛び立つ時代となり、「矢」には例えられない速さで「時」が流れていきます。走り続けたあげく、気が付いてみると「定年」というラインが目の前に立ちはだかつていました。

否応なしに過去を振り返らずを得ません。そうです。大学入学と時を同じくして「大学紛争」の嵐に巻き込まれてしまったのです。10カ月ものストライキを経験したのですが、沖縄へ帰省する勇気は持ち合わせていませんでした。討論集会の連続、生活のためのアルバイト、医学とは無縁の大学生活になってしまいました。よくぞ退学処分にならず、‘卒業延期’で済んだものだと、自らの運命に不可思議な何かを覚えるとともに、見放すことをしなかった大いなる力に、「有り難い」の意味を噛みしめる今日この頃の心境です。感謝。

52歳。立ち止まって考えなさいという指令がありました。「大腸がん」という難題でした。術前に、8センチもある大きな腫瘍に、主治医からは50%の確率での転移の存在を覚悟するようにと説明がありました。病院の院長職を拝命する前年でした。そうです。またしても、見捨てられることはなかったのです。感謝。

意識したことは全く無かったのですが、自分の不思議な習性に気が付きました。仕事場の机の引き出しに、過去30数年間の手帳が行儀よく並んでいるのです。メモ帳代わりの手帳ですので、思い出をたどるには有用です。

さらに不思議なことは、我が家の居間の柱には、やはり30年余の教会の正月の短冊が行儀よく飾られているのです。首里カトリック教会の神父様の思いと個性が表現された新年の短冊です。まさしく我が家の大黒柱です。

一部を列挙すると「この家に平安」（1984年）、「キリストの心を心とせよ」（1987年）、「わが家は祈りの家」（1991年）、「神のいつくしみは永遠」（1995年）、「神のはからいは限りなく、生涯私はその中に生きる」（1999年）、「主はいつくしみ深く、そのあわれみは永遠」（2006年）、「喜ぶ者とともに喜べ」（2009年）、「あなた方も互いに愛し合いなさい」（2012年）・・・と続く。感謝。

学生時代の教科書での勉強を怠ったがために、患者さんとの出会いがテキストになりました。多くの個性に満ち溢れた物語が演じられていきました。「欲望に振り回されてはいけない」「謙虚に生きなさい」。そしてつい最近、100歳の患者さんが教えてくださいました。

「生きる意欲は、自らの内部からひとりで生まれるのではなく、それを期待して待っている人の存在によって引き出されるのではないかと」。

毎年の新年の短冊で飾られた我が家の大黒柱も語りかけています。見捨てることなく、期待して待っている大いなる力に全てをゆだねなさい。そして、生きる勇気を引き出してもらいなさい・・・と。

残された何枚かの短冊を、正しい位置に飾るために一歩、一歩、噛みしめて行（生）きたい。感謝。